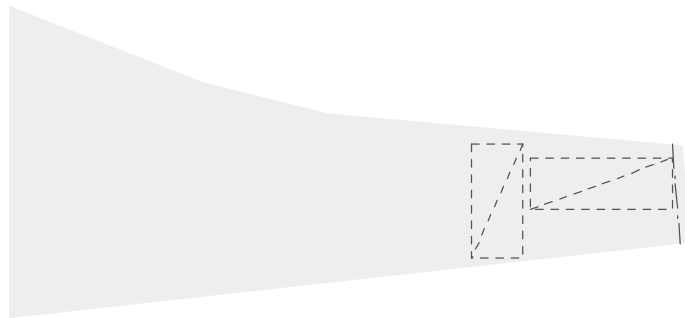


光る黒い箱

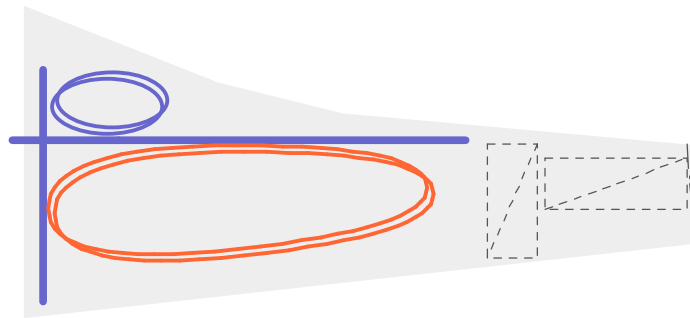
「家」というのは、とくぐいくつかの部屋の集まり」というふうに考えられがちですが、この計画ではそうではなく、「大きな一つの空間のあちこちにそれぞれの居場所がある」、そんな家づくりを考えました。「間」と「間」は仕切らずに、ゆるやかにつながるよう工夫しています。なにぶん敷地は変形しているため、まずは効率よく空間を確保することから始まりましたが、自ずと輪郭が見えてきて、そこに様々な要素を加えていきました。小さい規模ながらも動線を長くすることで感じられる大きさ、段差がもたらす高揚感、水平方向や上下方向に抜ける間隔、見えそうで見えないそんな見えざる部分を感じる奥行き、光の動きと時の移ろい…。空間を歩くと、色々なシーンが展開していくことと思います。

そして、何よりも留意したのは採光のこと。敷地は比較的密集した住宅街にあり、変形敷地も手伝って引きを取ることが出来ず、南面している辺が長いにもかかわらずそのメリットを生かしきれないのです。現地調査会が行われた日は冬でしたが、1:00 PM頃でも敷地は影に覆われていました。そのため、この計画ではハイサイドライトが必須と考えました。トップライトと違い、庇の設け方で取り込みたい光だけを選択できるので好都合です。吹抜けを通過して、1階へも十分な光がいきわたります。

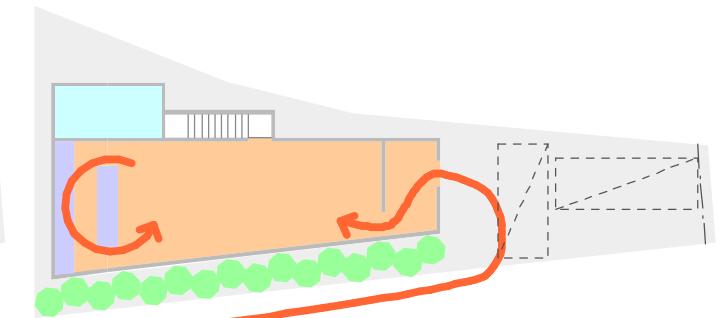
外観のイメージは黒い箱。黒は立体が引き締まって見え、シンプルさが際立つと思います。夜の帳が下りる頃には、ハイサイドライトやリボン状の出窓、窪みに設けられた側面の窓など、黒い箱に穿たれた様々な開口から光が溢れ出し、日中とは反転した世界が生まれることでしょう。対照的に、内部は大切な調度品の数々が映えるよう、白基調。珪藻土などによる左官の質感を表現したいと考えています。そこに建物の骨格である木の架構が空間を統べるべく、力強く現れるような構成を考えています。



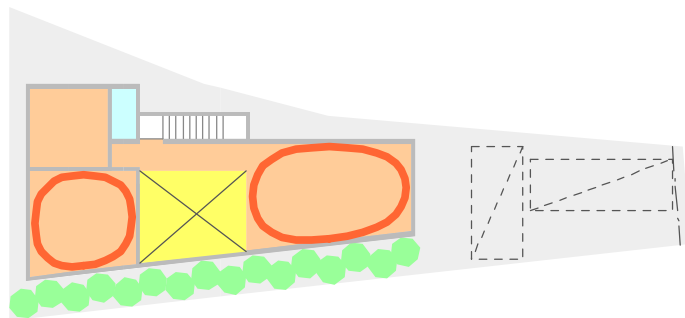
1 変形敷地に対し、効率よく台分の駐車スペースを確保



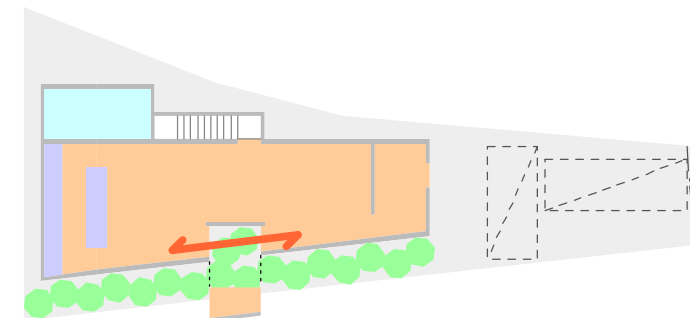
2 西側隣地境界線を基準とし、それと直交する軸を背骨とする。その北側には水廻り、南側にはメインの空間をゾーニングする。



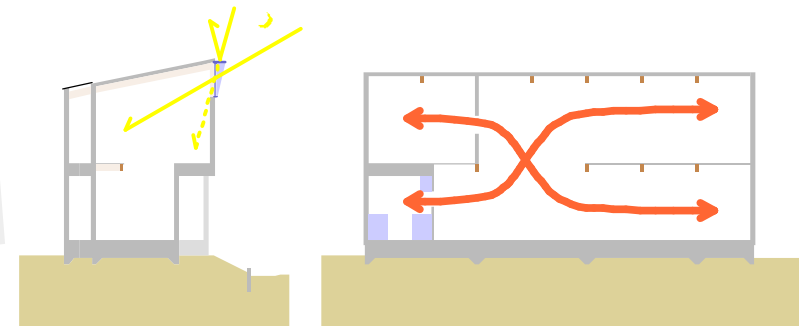
3 建物の南には1.2m幅の緑を配し、ファサードとその緑に誘われて、建物にアプローチする。1階には、水廻りと隣り合うようキッチンを設置し、また回遊性をもたせ、機能性を高める。階段は、東西の中間に配置。



4 階段を間に挟んで両サイドに親と子供のスペースをとる。その中央には吹抜けを設け、上下階の空間が通し合う



5 1階の一部を切り取り、南側の緑をより積極的に内に取り込む。緑を挟んだ部屋から部屋へ抜けるシースルーが楽しい。1階で切り取った床は2階の床に追加し、変形した吹きぬげが創られる。



6 ハイサイドライトからの光は、吹抜けを通過し1階まで届く。室内からは、青空に浮かぶ雲や夜には月の姿を探ることが出来る。夏の直射は遮断するよう、必要な庇を設ける。

7 上下水平方向に空間がのびやかに連続し、どこにいても、家族の気配をお互いが感じられる。